富山市の中世城館(3)
―富山市小西北遺跡―

はじめに

遺跡は富山市北部の小西地内に所在します(図1)。常願寺川左岸の扇状地上に立地し、標高は9mです。

平成6・10年度に、特別擁護老人ホーム建築に先立ち約4,300㎡の発掘調査を実施しました。

その結果、鎌倉～室町時代の堀跡、掘立柱建物、井戸跡、土坑、区画溝などを確認しました。

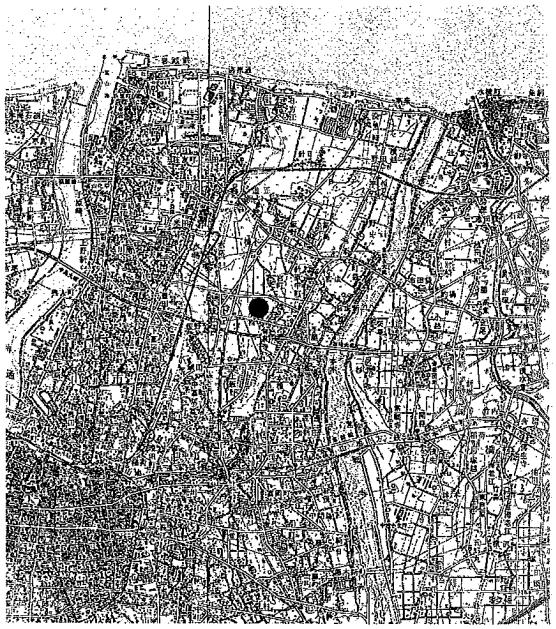


図1　遺跡位置図

居館跡について

発見された堀跡は、鎌倉～室町時代を中心に存在した「居館」の周囲をめぐる堀跡と考えられます。

居館とは、在地の領主層や有力武士の館で、堀や土塁を築く防御的色彩の強いものです。

この時代の居館の特色としては、一辺が半町（約50m）または1町（約100m）の方形区画の堀を周囲に廻らし、堀の内側には土塁を築く場合が多く、土塁の内側が居住空間になります。

本遺跡の場合は、全体規模は不明ですが、少なくとも半町四方の規模があると推定されます。

堀は最大幅約5m、最大深さ約1mで、東西40m、南北11mを確認しました。堀の底には、小さな張出しや橋状に高まった浅い部分があり、堀の水が淀むような構造になっていました。

堀の中からは青磁、珠洲、漆塗椀、小柄のほか、焦げた木製品や焼けて壊れた礫が多く出土しました。

堀の内側には、幅約4mの土塁が存在した痕跡を一部に認めました。高さは不明です。

居住区域からは、溝、素掘り井戸、土坑、杭列、柱穴などを検出しました。土坑は、廃棄穴（ゴミ捨て穴）、水溜桝として使われたと考えられます。

特に廃棄穴のひとつ（ゴミ捨て穴）には、200本以上もの箸が捨てられており、そのなかに混じって漆塗小皿や漆櫛が出土しました。

漆塗小皿は、内面中央に「三つ盛り丸に三頭右巴」の文様がベンガラ（酸化鉄）で描かれた鎌倉漆器で、木地の厚さ1.5mmという非常に高度な削出技術によって製作されています。

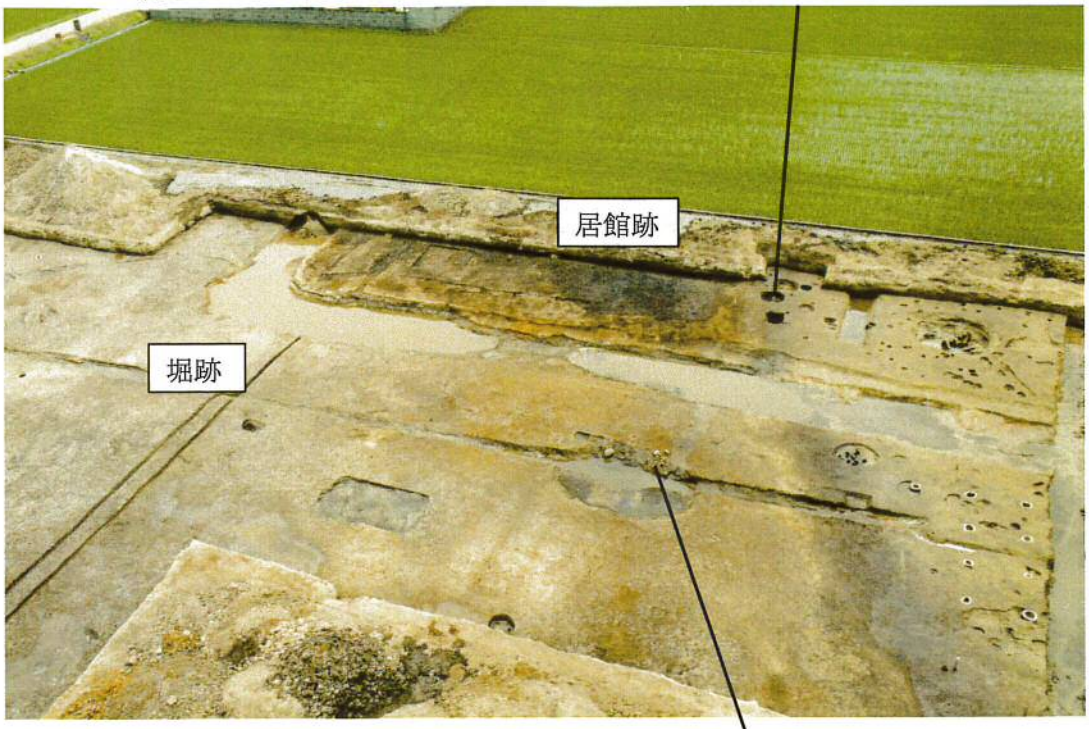
本遺跡の歴史的意味について

本遺跡は、室町時代を中心に存在した堀と土塁をもつ有力武士（武将クラス以上か？）の居館跡と推定されます。その理由は、(1)堀から武器である小柄の出土、(2)高級品とされる鎌倉漆器や青白磁の存在です。

鎌倉～室町時代における本遺跡周辺には、「小針原庄」「弘田庄」「米田庄」などの荘園・国衙領が形成されます。本遺跡の有力武将は、これらの荘園のうちいずれかの管理に関わったか、あるいは戦国時代に入って確認される「いいのそうほ」(飯野惣保？)の前身となった荘園などを管理したと推定されます。また、遺跡に隣接する三上村には飯野総社八幡社が存在し、その北側にある宮町遺跡も含め大きな社地を有したとされており、それらとの関連性も視野に入れる必要があるかもしれません。

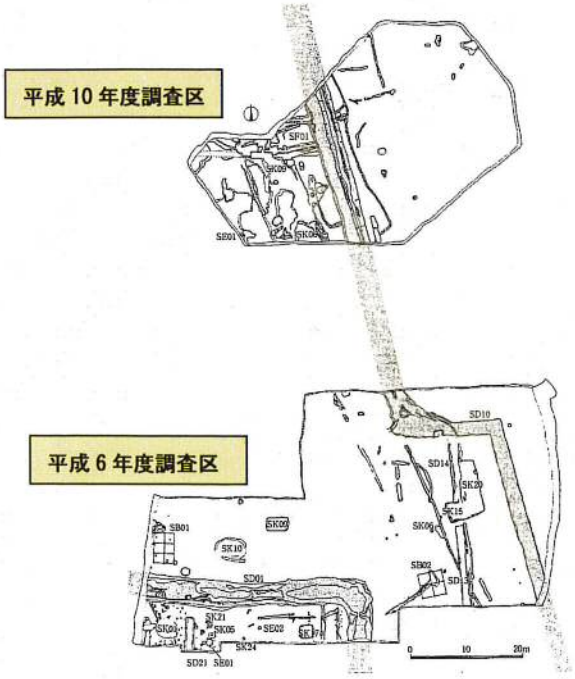
漆塗小皿と漆櫛

漆塗小皿と漆櫛などが出土した廃棄穴



居館跡の全景

土師器皿の廃棄状態(SK10)



遺構配置図